



データサイエンティスト座談会

株式会社PREVENT
データサイエンティスト

戸田 拓弥

Profile

大学で理学療法について学ぶなか、重症化予防事業に興味を持ち、2018年にPREVENTに入社。医療データ解析サービス「Myscope」や生活習慣改善支援プログラム「Mystar」の開発、機能拡充に携わる。博士(理学)。

住友生命保険相互会社
AIオフィサー

藤澤 陽介

Profile

統計学やアクチュアリーサイエンスを専門とし、プログラミングやデータを活用した保険の商品設計を得意とする。住友生命には2020年に入社し、2021年4月よりAIオフィサー(AIO)に就任、データ分析チーム統括や教育に携わる。

住友生命保険相互会社
データサイエンティスト

小野里 尚紀

Profile

新卒採用の「デジタル・システム」コースの1期生として、2020年に住友生命に入社。「Vitality」の疾病リスクレポートなど新機能開発に携わるほか、生成系AIの活用推進や職員向けの教育・研修なども担当。

「デジタル&データ」でウェルビーイング領域を深耕し、 多様な人や企業が参画するWaaSの新次元へ

住友生命では「デジタル&データ」を「スミセイ中期経営計画2025」の“推進エンジン”と位置づけています。2023年12月には、これまでWaaS(Well-being as a Service)エコシステムにおける重症化予防領域のパートナーであったPREVENTを新たにグループに加えてデジタル技術やデータの活用をさらに推し進め、新たな価値の共創を目指しています。ここでは、住友生命のデータ分析チームを統括するAIオフィサー、開発最前線に立つデータサイエンティスト、また新たにグループインしたPREVENTのデータサイエンティストの3名に、データの分析・活用の意義や今後の展望などについて語っていただきました。

専門性を活かした「デジタル&データ」の推進

Q デジタルやデータの活用において、現在注力していることをそれぞれ教えてください。

藤澤 私は、デジタルとデータは車の両輪のようなものだと考えています。住友生命にとっては、「Vitality」という健康増進サービスを1人でも多くのお客さまに届け、実践していただくために欠かせない両輪であり、まさに中期経営計画の推進エンジンと言えるものです。そのなかで私は、長年のアクチュアリーとしての経験を活かし、住友生命が注力しているデータ分析に関わるプロジェクトの統括、推進を担っています。「Vitality」を開発した南アフリカのディスカバリー社のデータサイエンティストとも月に1回、定期的にディスカッションをしており、今年2月には南アフリカを訪問してきたところです。

小野里 住友生命には、2020年度から「デジタル・システム」コース採用の枠が設けられているのですが、私はその1期生です。入社後はデータサイエンティストとして、「Vitality」の疾病リスクレポートなど新機能の開発に携わってきました。最近ではデータ分析を主とした開発プロジェクトのみならず、マネジメント領域にも活動の場がひろがってきています。生成系AI活用についても主体となって進めており、2023年7月には「Sumisei AI Chat Assistant」の運用を開始しました。これはグループ会社も含めた約1.7万人の職員を対象にしたもので、企画書や資料の作成など、日常業務の生産性向上にも大きく寄与します。この効果を最大化するには、部署に関わらず、全職員がITリテラシーを高める必要があります。そのため、職員向け研修のプログラム開発や講師などを担う機会も増えています。

戸田 PREVENTは、データ分析をもとにした重症化予防を専門とするスタートアップ企業。社内の研究組織「Insight Lab」を中心として、健康データや医療データを入手して重症化予防や健康維持・増進に活かすための研究をしています。私はデータサイエンティストとして入社後、医療データ解析サービス「Myscope」の立上

げに携わり、データ取得の方法やレポートの自動化など、様々なプロダクト作成をリードしました。現在は、データ基盤の整備に力を入れており、エンドユーザーが使いたいプログラムや見たいデータに、より簡易にアクセスできるような改良を行っています。

両社連携の現状

Q 住友生命とPREVENTの連携は、ここまでどのように進んでいますか？

藤澤 住友生命では現在、保険に加入しなくても単独でご利用いただける「Vitalityスマート」に注力しており、データの集積も一気に進んでいます。次の段階としては、集積したデータを活かし、「Vitality」のさらなる価値向上につなげていきたいと考えています。PREVENTは、こうしたデータ解析の領域が得意で実績も豊富なため、共にプロジェクトを推進していこうとなったわけです。「Vitality」を通して集積した膨大なデータをどう解析し、価値あるものとしてお客さまや社会に提示できるか、それが今後のカギになってくると思います。

戸田 「Vitality」の有効性や価値を学術的に示す場合には、PREVENTのノウハウが生きてくると思います。実際に、まずは論文執筆や発表から共同で進めていこうと考え、動き始めています。また、生活習慣改善による重症化予防プログラム「Mystar」で培ったノウハウを提供することで、サービス開発においても力になれるのではないかと考えています。

藤澤 お互いの強みを活かし、どんなシナジー効果を発揮できるか、まさに議論を尽くしているところです。

戸田 PREVENTの事業は医療や治療とは異なるため、様々なチャレンジができる。それが一番の魅力だと思っています。より健康になっていただくためにはどうすればいいか、という課題に正面から向き合い、アクティブにチャレンジしていきたいですね。

デジタル活用のための人財共育

Q デジタル人財共育について、
ここまでの取組みを教えてください。

藤 澤 PREVENTには、住友生命の人財共育にも協力してもらっています。当社では、「デジタル・システム」コース採用の枠を設けてデータサイエンティストを目指す人を毎年数名採用しているのですが、その研修内容の監修を戸田さんにもお願いしています。

戸 田 研修の内容は、実際にPREVENTの所有データで疑似的に分析を体験する、というもの。生のデータに触れることで、より実践的にスキルを身につけられると考えています。

藤 澤 特に今、当社で重視しているのは「デジタル企画人財」の共育です。データ分析をするにも、まずビジネス上の課題があって、それを解決するためのツールがデジタルやデータ、さらにはAIであるわけです。ですから私たちデータ分析側もビジネスへの理解が前提になりますし、一方の事業推進側もデジタルやデータに精通していることが重要になります。そこでビジネスマインドとITリテラシーを兼ね備えた人財を「デジタル企画人財」と位置づけ、各事業部門から推薦いただいた方に対して時間をかけて研修を実施するなど活動を本格化させています。

小野里 私自身、入社当初はデータ分析のスキルを養うことに精一杯だったのですが、いろいろな案件に携わるうちにビジネスへの理解も深まってきたという経験があります。データ分析チームも年々メンバーが増え、現在では数十人規模になってきたこともあり、組織としての力や成果を最大化するにはどうすればいいか、どうビジネスに貢献していくかということに焦点が移ってきています。実際に、職員向け研修のプログラム開発や講師など、社内のITリテラシー向上や後進の育成を私が担う機会も増えてきています。プレーヤーとしてスキルを磨き続けることも必要ですから、バランスを大切にしながら日々取り組んでいます。

藤 澤 小野里さんには、外部研修に参加して、新たなスキルや思想を社内に取り入れる役割も担ってもらっています。職員が社外で知見を得る機会は積極的につくっていきたいと思っているので、今後も継続していってほしいですね。

小野里 そうですね。私だけでなく、後輩も積極的に外部研修に参加していますし、住友生命としてもWaaSをキーワードに多様な企業と連携しています。企業や業界を超えて、多様な人や団体と交流することで、新たな知見を得ることはもちろん、当社事業をひろめることにつながればと思っています。

今後の展望

Q 両社の連携において、
今後注力することは何ですか？

藤 澤 日々の運動データと健康診断の結果、さらに保険金等のお支払い状況などのデータがつながっているのが、「Vitality」の強みです。こうした統合データを活用することで、2023年には5大生活習慣病の疾病リスクレポート機能を追加しました。データ集積が進めば、他の疾病リスクレポートも可能になるかもしれません。将来的にはお客さまの健康状態をより詳しく可視化し、健康増進につながる活動を促すサービスや機能開発につなげていきたいと考えています。

小野里 歩数や心拍数など、日常的な運動や健康に関わるデータを取得できるのは、保険会社では住友生命だけ。それが一番の強みだと思います。さらに価値を高めていくには、「Vitality」のデータや保険金の支払いデータなどを統合し、一元的に管理することが必要になると考えています。データの蓄積を進めるだけでなく、それをグループ全体で活用できる状態にしていかなければなりません。

藤 澤 そうですね。様々なデータとの連携を進めることで、サービスの幅をひろげていきたいですね。

戸 田 PREVENTと住友生命で、企業の垣根を超えてデータ連携をすることができれば、シナジーを最大化できると思いますが、それには相当の準備期間も必要です。一歩ずつ、できるところから進

めていくイメージでしょうか。例えば、PREVENTでは「Mystar」のように生活習慣改善につながる行動変容を促すプログラムをすでに運用しています。ユーザーのリアクション分析など、研究フィールドの一環として活用いただくという可能性もあるのではないかと考えています。ほかにも当社には、レセプトや健診データなど住友生命が持っていないデータもあるので、いろいろな形で連携の方法を探っていきたいと思っています。

Q データ活用によって、生命保険業界はどう変わっていくでしょうか。

藤澤 社会のために何ができるかを常に考え、事業成長と社会課題の解決を両輪として進めていくのが生命保険会社の最大の使命であり、そのためのデータ分析・活用だと思っています。なかでも住友生命は「Vitality」を普及促進することで、お客さまにより健康になっていただき、国家的課題である社会保障費の抑制にもつなげていくことができます。「社会全体の幸せに貢献するんだ」という意気込みで、データ分析チーム一丸となってウェルビーイング領域に注力していきたいと考えています。

小野里 私も藤澤さんと近い考えです。私は以前から生命保険や健康に関心を持っていたことから、PREVENTとの連携プロジェクトに加わったという経緯があります。データ分析とビジネスの両方の理解が深まるにつれて、「これからの生命保険業界にとってウェルビーイング領域こそ主戦場になる」という想いを強くしています。従来の保険は、契約時と保険金支払い時という“点”での関わりしかないイメージでした。もっとお客さまとの接点を増やして、普段から健康サポートをする、すなわち“線”や“面”での関わりをしていくことが重要だと考えています。

戸田 確かに私も、以前は「何かあったときの“備え”」というのが保険のイメージでした。「Vitality」はそんな保険のイメージをまさに一新するものです。保険に入ったら、気づけば健康になっている、そんな「生活の一部のように当たり前であって、しかもどんどん健康になれる保険」になればいいと思っています。PREVENTでは、これまで重症化を抑制するという考えでサービス設計をして

きましたが、住友生命のグループ会社となったことで、WaaSをキーワードとして未病層をはじめとするもっと前の段階にもアプローチできるのではないかと社内でも期待が高まっています。

Q 最後に、皆さんから今後の意気込みをお聞かせください。

藤澤 実は私自身、「Vitality」の存在を知るまでは運動習慣がないタイプでした。しかし、好奇心から試しに加入してみると、自分の健康状態が目に見えて変わってきたのです。年を重ねた今でも「若返っているのでは」と感じるほど。ユーザーとしての自身の経験に、「データ」というわかりやすい結果を加えることで、より説得力を持って有用性を発信する。そのような機会を、積極的につくっていければと思っています。

小野里 お客さまのウェルビーイングに貢献するためには、個の力だけではなく組織の力を高めることが必要不可欠です。冒頭に話したように、管理職としてマネジメントスキルも磨くことが、自身のこれからの課題だと認識しています。さらに将来的には、住友生命の掲げるWaaSに参画してくれる人や団体を増やし、大きな輪にしていけるよう、プロジェクトを推進するエンジンになりたいと思います。

戸田 私も小野里さんと同様にマネジメント業務が増えており、データを分析するだけでなく、それをどう活用するか、を考えることが多くなっています。その観点で、ノウハウの共有や知見の連携も、これから大いに進めていきたいと思っています。PREVENTと住友生命、お互いに自由闊達にディスカッションし、面白いアイデアがあればまずPREVENTで試してみる。言うなれば、住友生命の社内ラボのような存在になれば嬉しいですね。

藤澤 戸田さんとは価値観や方向性を共有できていて、打ち合わせでもどんどん新しいアイデアも出てきて本当にいいパートナーだと感じています。以前から同じ会社にいたのでは、と錯覚するほどです。「ウェルビーイングに貢献する『なくてはならない保険会社グループ』」の実現に向けて、さらに連携を深めていきましょう。